

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 菊池秀夫
 〒245-0013
 神奈川県横浜市泉区中田東3-11-1-2
 Tel.090-1201-5200(河原)
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail zenyamaren@gmail.com

会誌「邪馬台国新聞」 第2号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

平成二十七年も師走に入り、邪馬台国と古代史解明を掲げて昨年四月に発足した全国邪馬台国連絡協議会も、一年八か月が経過しました。この十二月五日現在での団体会員数は十八団体所属人員は約一八〇〇〇名。発足時十五団体、個人正会員は二百二十三名発足時七十五名、特別顧問は二十五名(発足時二十名)とほぼ順調に拡大してまいりました。この間の活動を振り返りますと大会開催は、

◎第1回全国大会(平成二十六年十月、東京都)
 テーマ・考古学・文献史学から見た邪馬台国/科学的年代論で解く邪馬台国



静岡県沼津市 高尾山古墳

◎第2回全国大会(平成二十七年十一月、福岡県)
 テーマ・久留米から邪馬台国が見える

◎第1回東京地区大会(平成二十六年七月、東京都)
 テーマ・私の邪馬台国論

◎第1回九州地区大会(平成二十七年五月、福岡県)
 テーマ・筑紫の国の女王たち

◎第2回東京地区大会(平成二十七年六月、東京都)
 テーマ・邪馬台国畿内説を考える

◎第2回九州地区大会(平成二十七年十月、佐賀県)
 テーマ・古代佐賀は輝いていた【卑弥呼の声が聞こえる】

◎第1回会員発表会(平成二十七年八月、東京都)
 なお、これから平成二十七年年度中(来年三月まで)に企画している大会は以下の通りです。

◎第1回九州地区大会(平成二十八年二月、静岡県)
 沼津市の高尾山古墳は古墳時代初期の東日本最大級・最古の前方後方墳で、狗奴国王の墓との説もありますが道路計画で全面破壊の予定です。地元で保存運動が起こり当会も保存を求める声明を出しました。これと連動し沼津市でサミットを実施します。

◎第2回会員発表会(平成二十八年三月、東京都)
 平成二十八年度は、引き続き第3回全国大会(平成二十八年十月、鳥取県で開催予定)、各地区大会、会員発表会、講習会(勉強会)、狗奴国サミットのようなテーマ大会などを地元自治体等と共同し地域興しを兼ねて積極的に開催する予定です。大会テーマは、地域興しを重視するテーマと、当会の最終目的である「邪馬台国と古代史の解明」に沿ったテーマのバランスを考えながら実施して行きたいと考えております。

ホームページは、当会の対外的PRと新規会員獲得に重要な役割を持ち、徐々に充実しつつあります。【私の「邪馬台国論」「古代史論」】のコーナーは、会員論文(二〇〇〇字以内)を紹介しています。すでに三十二名の会員がネット上で自説を発表されています。また、会員限定の「会員交流広場」の掲示板は、会員相互の意見交換の場として利用されています。さらに、【新着ニュース・トピックス】は邪馬台国や古代史に関する最新のニュースとトピックスを幅広く収集し、情報提供に努めております。会員専用のメールアドレスは、大会案内、会員限定内部情報や各種イベント情報を収集し会員の皆様へのサービスに努めております。また当会主催の全国大会・地区大会を撮影したビデオ(四〜六時間)を会員限定で配信しております。当会は全国組織です。会員であればどこにお住まいでも過去大会のビデオを自宅で聴講できます。ホームページとメールアドレスは今後さらに充実してまいります。皆様のご意見とご提案を是非お寄せ下さい。

組織体制と財政は今後改善する必要があります。当会の財政はほとんど会員年会費と寄付金でまかなわれ、その財政基盤は脆弱です。このため、新規会員獲得が重要で、お知り合いの方などに入会のお声をかけていただくようお願い申し上げます。もう一つは公的助成金や寄付金を受けやすくするために、「一般社団法人」への移行を理事会で検討中で、実施となれば総会を提案させていただきます。今回、この会誌「邪馬台国新聞」第2号を皆様へお届けしましたが、今後さらに充実と発行回数増加を図りたいと思います。皆様、それでは良いお年をお迎えください。

全国邪馬台国連絡協議会 東京大会

邪馬台国 × 気候変動

気候変動が文明の盛衰に与えた影響を科学的に解明する

5月22日(日)

13:00スタート [12:30受付開始]

参加費
一般 1,500円
会員 1,200円
学生 1,000円

会場

品川区総合区民会館きゅりあん
(JR大井町駅中央口より徒歩1分)



第1部 | 13:15 ~ 14:45

「気候文明史」世界を変えた8万年の攻防から日本古代史を考察する



田家 康先生

日本気象学研究会 東京支部長

著書『異常気象が変えた人類の歴史』『気候で読み解く日本の歴史—異常気象との攻防1400年』林彰彦

1980年代以降、古気候学の分析手法は飛躍的に進歩した。樹木の年輪幅や地層に含まれる花粉分析による気温推定等に対し海底・湖底の堆積物やグリーンランド・南極の水の柱を採取し、その中の酸素や炭素の同位体等を利用して、より詳細な解析が可能になった。かくして古気候学の成果は考古学や文献的な史料と比較検証するレベルに達した。果たして古代史の姿はどのように確認され、あるいは変遷したのだろうか。寒冷化、温暖化、干ばつ、火山噴火・・・。歴史のエポックの背景に隠された気象の影響を読み解きます。

第2部 | 15:00 ~ 16:30

『魏志』倭人伝に記された倭国乱と気候変動



西川 寿勝先生

大阪府教育委員会

著書『邪馬台国—倭古・羅漢語から読み解く』『魏志の原典—巨大古墳時代の華と外史』林彰彦

古墳時代は弥生時代の社会発展の上に成立すると考えられます。ところが、池上・曾根遺跡など、弥生時代を代表する環濠集落は、弥生時代の内に衰退し、古墳時代まで継続しません。同時代の視点は、『魏志』倭人伝に記された卑弥呼の時代とされ、「倭国乱」といって、社会変動が記されます。

その他、中国や半島の史料には、西暦190年代に大飢饉が記され、記紀には崇神天皇の時代に大飢饉があったと記します。古墳時代の開始年代を明らかにし、考古学や理化学研究の応用で整合できれば、古墳時代の社会成立の謎が解明できるかもしれません。

全国邪馬台国連絡協議会 東京支部

問合せ先など

各支部活動報告

東京支部活動方針

東京支部長 内野 勝弘

全国邪馬台国連絡協議会の設立趣旨は

①邪馬台国と古代史の解明

②地域おこし、大会の実施

③全国ネットワークの構築である。

これらを推進すべく東京地区・支部は下記の活動をする

①専門家、在野研究家、会員と協力して科学的探究方法

での解明をめざす

②東京地区の団体、個人会員、地域、行政、企業などと

連携し講演会や地域イベント、発表会などを実施し地

域の活性化に貢献する

③地区内の古代史団体、愛好家の会員獲得や交流、視聴

などの活動を実施し合わせて収支の健全化を図る

組織

支部長 内野 勝弘

副支部長 丸地 三郎

事務局長 藤江かおり

会計 高取 敦

メディア委員 伊藤 雅文

地域委員 下原 幹子

具体的推進課題

①東京大会(第三回の計画)……年間二回実施(第三回五月

二十二日、第四回十一月頃)

②全国大会……平成三十年予定、本報と調整

③地区イベントの計画(研究会、勉強会、生涯学習など)

④団体会員、個人会員の募集、獲得

⑤年間予算(本部との調整、配分)

⑥支部収入と支出の健全化(当面、東京大会の黒字化)

⑦東京支部会議(定期会議、インターネットの活用)

⑧活動方針と年間スケジュールの作成

第三回東京大会

平成二十八年五月二十二日(日曜日) きゅりあん(東京都

品川区大井町駅)

十二時から十七時 三五〇人会場

講演テーマ

(仮)「気候変動と古代史」気候変動が文明の盛衰(興亡)に

どのように影響を与えたかを科学的に検証する。

講演者

西川 寿勝先生(大阪府教育委員会 文化財保護課 副主査)

(仮)「魏志倭人伝」に記された「倭国に大乱」と気候変動

田家 康先生(日本気象予報士会 東京支部長、「独」農

林漁業信用基金 部長)

(仮)「気候文明史」世界を変えた八万年の攻防から日本古

代史を考察する

著書「気候文明史」八万年の攻防 日経新聞社「世界

史を変えた異常気象史」同

近畿・東海支部

第一回会合 会員初顔合わせのレポート

記(文責)……支部長 井上 筑前

関西は歴史の宝庫である。遺跡、名所旧跡は言うに及ばず、

資料館・博物館には古蹟・出土物等々が、所狭しと並んでい

る。日本の歴史を勉強する上で、こんなに歴史学習の環境に

恵まれている地域は他に無いと言ってもよい。しかしながら、

それは日本に中央集権が確立し、曲がりなりにも律令国家の

萌芽が見え始める六・七世紀以降の事である。

確かに古蹟は近畿地方に多く、古墳時代は近畿を中心に形

成されていた感はある。だが昨今の研究結果では、その古墳

すら西(九州)から来たという可能性もある。また、大和朝

廷の覇権によって築かれたのでは無い古墳も、各地で多く発

見されている。つまりは、大王(おおきみ・大君)達が「家

所にいとまあらず」と闘いを繰り返して、大和朝廷の萌芽を奈

良具に定めようとする前の時代は、全国その他の地域と関西

地方も、その生活環境、社会環境は殆ど同等だったとみて良

い。何ら優位性は無い。

紀元前後、弥生文化が西から到来し関西一円に根付き始め

る。人々は稲作を開始し、狩猟・採集生活では得られなかつ

た大なる栄養素をイネから授かる事になった。生活は変化

し、イネ以外の栽培も覚え、やがて人々は穀物を保存するよ

うになり「蓄」が生まれた。

その蓄の所有を巡って争いが発生し、おそらくは、「倭国

大乱」という状況はここ近畿でも繰り返されていったに違いな

い。やがて何処からか、誰からか、青銅器の製作技術がもた

らされ、近畿一円に「銅鐻文化」が拡大する。銅鐻も西から

来たという説もあるが、銅鐻信楽文化の発展・拡張は、とて

も九州やその他の地方の比では無い。昨今出雲における銅鐻の

存在も一説を生じたが、関西における銅鐻文化は、関西一円

津々浦々にまで広がっていくのである。「邪馬台国」がもし

関西にあったとすれば、この銅鐻文化の影響を色濃くとどめ

たクニだったに違いない。

全邪馬連・近畿東海支部の有志は、平成二十七年十月九日、

これらの古代文化の究明に更なる連携を深めよう、この日

始めて新大阪の大阪府営会議場に会した。支部会員総数二十

数名の内、東海地方・山陰地方を除く十数名に案内を差し上

げ、驚愕会長にも東京からお越し頂き、総計十名が参集した。

・高校生との頃から推理小説ファンで、驚じて「邪馬台国」の

誌に惹かれた。
・学生時代に古代史に興味を持ち、現在、いくつかの歴史の会に参加している。

・古代史研究を始めて四十七年になる。古代史全集を出版社から出しており、現在十四巻刊行した。これからも継続して刊行するつもり。

・小学生一、二年の頃卑弥呼の話を知った。今年いっぱいリタイヤ、来年からは暇になるので、じっくりと古代史の勉強に取り掛かりたい。邪馬台国は九州説である。

・邪馬台国奈良説には大いに疑問を感じる。邪馬台国は東遷してマキムクへ来た。大和の古代に「ヤマト」という地名は無いので、他から来たのは間違いない。

・邪馬台国は卑弥呼の住む北九州と、東(近畿?)の都市との二ヶ所にあったのでは無いか?

・富田林に住み二上山が目の前で古代史に興味を抱いた。万葉集に興味を持ち、直木孝次郎、上田正昭、井上光貞等々の著作で邪馬台国を勉強した。元は邪馬台国東遷説だった。邪馬台国ヤマト説(マキムク)である。

・福岡県の出身だが、始めて大阪へ来たとき天気がとても良いので驚いた。九州の邪馬台国はこの温暖な気候の地へ移ってきたのではないか。難升米の難という苗字は中国にあるそうだが、彼は渡来人だったのではないだろうか。

・福岡出身だが、福岡よりも大阪の方が気に入っている。そう言う意味では邪馬台国は近畿でも構わないのだが、今までのデータを客観的に見れば邪馬台国は九州しかあり得ないと思う。

・会議室は、前記の御意見を浴び述べた会員の熱気で、クーラーの温度を二回も設定し直す程だった。自説を本にした人も数人居て、一人十五分と定めた自己紹介も、二十分を越える人が続出。今日の初会議は自己紹介に終了した。

最後に驚崎会長から、「連絡協議会自体もまだ法人化とか

支部との関係とか、色々流動的な部分を含んでいるので、関西でもあせらず地道に活動の基礎を築いていったら良いのでは無いか。」という言葉を受けて、再会を約して懇親会へと繰り出した。

近畿では当然ながら、一般的には「邪馬台国畿内説」が他を圧倒している。学界に至っては八割の学者・研究者が畿内説である。しかし中には、「私は奈良県から給料を買っている」とか、「いやあ、この(職)環境では九州説の方が有利だ等」と言えませぬ」と講演会で堂々と話す研究者もいるので、学説は必ずしも研究心一筋で唱えられているのではない、という一面を我々は知るのであるが、今日参集頂いた皆様も、九州説、近畿(奈良)説入り交じっていた。奈良に生まれ、今も奈良在住の人が九州説を唱えているのは驚かされた。今回は年明けに開催することを決めて、各員ほろ酔い気分で開催したのであった。

平成二十七年十一月五日

九州支部の活動

九州支部長 関家 敏正

九州支部は二〇一五年五月九日に福岡県太宰府市の九州国立博物館ホールで全邪馬連第一回九州地区大会福岡「筑紫の国の女王たち」を一七〇人の参加で開催。また、十月十七日に佐賀市の県立集会施設アバンセで同第二回九州地区大会佐賀「卑弥呼の声を聞かせる」をつづいて開催し、午前午後の二部構成の講演会にのべ二〇〇人が参加し、大きな成功を収めました。

また十一月二十九日午後には福岡県久留米市内の石橋文化センター・共同ホールで全邪馬連第二回全国大会「五福岡を実行委員会主催、四〇〇〇人の参加で成功させるなど、大きな飛躍を勝ち取りました。

その力は何といっても全邪馬連の結成という組織的な基盤

ができたこと。それによってこれまで独自に活動してきた福岡、佐賀、熊本、大分などの同好者と組織が連携を取り合い、互いに協力しあうことになったことが大きいと思われまます。それぞれの大会の骨子だけを紹介しします。

第一回九州地区大会福岡は全邪馬連九州支部の河村哲夫副支部長、高野文生事業部長らが中心となり、福岡県文化団体連合会などとの共催で開催されました。九州各県だけでなく、福島県、千葉県、埼玉県、神奈川県、鳥取県などからも参加。リレー講演は①「奇明天皇と筑紫の女神」志村裕子氏、②「北部九州の神功皇后伝承」河村哲夫氏、③「卑弥呼と天照大神」安本美典氏の三題・三講師でした。講演の詳細については「季刊邪馬台国」の二二六号に収録されています。大会では驚崎弘明全邪馬連会長と関家敏正九州支部長が主催者あいさつをしました。

第二回九州地区大会佐賀は古代史フェスタ「卑弥呼の声を聞かせる」のテーマで開かれました。主催は全邪馬連九州支部と佐賀市に事務局を置く邪馬台国を考える会(奥野正男会長・全邪馬連加盟)の共催で取り組まれ、午前中の第一部「集中講座」に約一〇〇人、午後の第二部「リレー講演」に約一三〇人が参加しました。

第一部の集中講座「倭人伝の国々」は午前九時半から始まるという早い時間帯にもかかわらず、会場いっぱい参加で、演題と講師は次の通りでした。①「魏志倭人伝をまともな読めば」邪馬台国を考える会事務局局長関家敏正氏、②「北部九州と佐賀の弥生の国々」佐賀県教育委員会文化財課吉野ヶ里遺跡担当係長波谷裕格氏、③「狗奴国」卑弥呼と狗古智卑国」邪馬台国を考える会理事平石明俊氏。

午後の第二部はアバンセホールで開かれました。主催者あいさつに立った驚崎弘明全邪馬連会長は会の結成の意義と邪馬台国論争を通じての我が国古代史研究の進展への期待を語り、また会の活動を紹介して参加を強く呼びかけました。地

元の実行委員会を代表して、那馬台国を考える会事務局長の関家敏正氏が「那馬台国論争にもルールを」と題し①「魏志倭人伝」に依拠すべきこと②考古学的資料の正確な評価③日本の国家発展史とその地域の発展史との整合性④中国との交渉の歴史的証明⑤の四つの基準から見べきことを訴えました。

午後零時半から四時半までのリレー講演は「吉野ヶ里遺跡と大陵文化」のテーマで四人が登壇。演題と講師は次のようでした。①「吉野ヶ里遺跡と原の辻遺跡」元原の辻遺跡調査事務所長・安楽勉氏、②「銅鏡百枚(後漢鏡)」と那馬台国の東遷 元宮崎公立大学教授・奥野正男氏、③「吉野ヶ里遺跡に見る中国文化」佐賀城本丸歴史館長・七田忠昭氏、④「那馬台国論争と九州説」学校法人旭学園理事長・高島忠平氏。七人の講演要旨は「季刊那馬台国(二八号)」に掲載予定です。

全那馬連第二回全国大会 in 福岡は、四五〇人収容の会場にほぼ満席に近い四〇〇人が参加し、大盛況でした。主催者あいさつで鷲崎弘明会長が全那馬連の趣旨や活動を紹介、加盟を呼びかけました。講演会は「久留米から那馬台国が見える」をテーマに、講師は高島忠平氏、関川尚功氏、安本美典氏の三人。内容はそれぞれ「那馬台国九州説」を展開したもので、濃厚な内容でした。

このほかにも、奈良新聞主催「明日香と吉野ヶ里の両歴史公園協力で、テレビ公開討論会が九月二十七日に両歴史公園で開催されました。全那馬連九州支部の関家敏正支部長、河村哲夫支部長も民間研究者として登壇、自説を語りました。

また、吉野ヶ里公園や、福岡市立博物館であついで「奴国展」が特別展として開催されるなど、魏志倭人伝や那馬台国にからむ啓蒙普及活動が行われたことも記録しておきたいことです。

顧問投稿稿 (アイウエオ順)

「日本人とはなににか」

中国文明集団三波渡來說

元九州朝日放送キャスター 香岐 一郎

東京に戻って三年半、体調不良に悩みながら、すすめる人あつて自説のビデオ化を実行した。短くわかりやすくに苦闘した、経費は五万円。

冒頭で、人類学・遺伝学上の成果をぼくなりに話した。男子Y染色体から今なお縄文系三十二%、弥生系五十三%強、そのほか十四%という分布だ。

文獻の柱は『史記』『三国志』『梁書』から

前三世紀 徐福集團渡来 物証は銅鐻

三世紀 倭人伝/吳水軍渡来 物証は古墳

五世紀 列馬五分国 仏教民間伝来 仏像

倭人伝を除いて学界は無視黙殺の史料だ。平田篤胤や白鳥庫吉は扶桑国を証言した僧・慧深を大詐欺師と罵倒している。二十世紀の百年で「扶桑国論」を本にしたのは白鳥と不肖・いき一郎のふたりだけだ。拙著「扶桑国は関西にあった」は福岡・兼書房一九九五年刊・図書館協会推薦書だが売れていない。

一九九七年、ぼくは福岡から沖縄に移住し七年住んだ。大昔、那覇地方裁判所長だった祖父ゆかりの地で、ぼくは民放労組の九州地区代表として一九六〇年代に祖国復帰運動に熱中したことがあつた。

一九九九年、扶桑国僧慧深の「訪中一五〇〇周年」のシンポを大阪・東京・名古屋・福岡で開いた(福岡は紀伊國屋書店協力)。

詐欺師扱いの僧の無念を晴らそうという秘かな思いがあつたのだ。報告書は国会図書館に収めている。サポーターはペリタタロス(五世皇親)の清水守民君(ブログ好評)で、各地

の市民派、知人友人の協力があり、のべ一六〇人の参加で沖縄からのリモコンとしては大成功といえる。今は亡き関西の松下燦・兼政明・兼俊作・藤田友治ら諸兄の参加が忘れがたい。

*

沖縄から一時東京に移ったが、副収入を考え大阪に住んで

巨大古墳と姫路以西の広大山城の謎に迫ろうとした。蛮勇だが、崇式部と西園寺が厳しく追究した「日記」批判にイマ・ジャーナリストとして七十代を賭ける気になった。敗戦前の中学一年、滋賀に疎開し、四年後に金沢の学生寮に住んだ経験が役立った。この貧乏老人は中国や韓国に行くのに便利な神戸からの船便を利用した。船の神戸→天津は朝飯付き往復二万円余(今は三万円)か、その大部屋。運び屋の雷のような軒が思い出た。船酔いに強く一級ボート免許を取ったぼくも七十七歳頃から酔うようになり、安い空の便に替えている。

三度目の関西生活、松下燦(同じ朝日放送系列の先輩友人)ついで藤田友治君が急逝した。

東大阪市の古代史研究会伊ヶ崎淑彦代表・チヨチヒョン副代表の諸君から学ぶものが多かった。月例会に通い、退職教職員会の現代史研究会にも参加させてもらった。

こうして、扶桑国の同時代を扱った小著「継体天皇を疑う」(かもがわ出版二〇一一年)を上梓し、このほかも図書館協会の推薦を受けている。翌十二年に十年がかりの藤田・伊ヶ崎・いき主編の『ゼロからの古代史事典』(通史)がミネルヴァ書房から上梓された。十数名の著者のなかでプロ考古学者とヤマト早期統一政権者各一名だ。

*

二〇一四年、全国那馬台国連絡協議会が結成され、顧問就任の依頼を受けた。よく聴くと最初から研究者の方が多く、ぼくは光栄ではあるが身の縮む思いが迫った。どう貢献できるかが、ぼくの課題だと自覚したことはいうまでもない。五

十四歳で九州朝日放送を退職後、日本記者クラブに留まった三十年が役立つかもしれない。諸賢もメディア利用のアイデアをお寄せいただきたい。

昔と今とは健康寿命の測定が異なるが、朝鮮古代史と日韓關係史を研究した大伯父・鮎貝房之進は大戦後・引き揚げ・八十四歳・博多で亡父らに看取られて逝ったが、今は妻・元浪速技者岡島たき子と共に東北・氣仙沼の丘に眠っている。ぼくは東日本大震災の半年後、友人らの協力による義援金を市立図書館に寄付し、愚息ともども本家・煙草館の灯籠復旧に寸志を贈り、五年ぶりの墓参を果たした。

*

八十年代半ば、体調不良と対座し、どう思考を進めていくかが大きな課題だ。この夏は大学四年以来の体調不良とワードの変調に悩みながらA4・一五〇枚を書き終えた。本文冒頭の三大文明渡來說だ。

ぼくは東京の西北のワルガキ、先生の覚えがよくなかった。やつと都立の旧制中学に受かったほう、三十近くの中学でぼくの入った二十中という名称は「大衆」に変わっている。静かとはいえない政治家亀井静香さん、売れっ子の池上彰さんが後輩だそう。敗戦間近、東洋史の相羽玲三先生が名調子で中国史を講義し、一学期だけで応石・出征され、ぼくは関西に疎開転校した。この先生と前述の大伯父鮎貝と高校の鳥山喜一校長(ロングセラー「黄河の水」角川文庫)、さらに義父松本解雄(元愛媛大・仏教学者)の存在には恵まれた。松本は七十代、ジョギングに真面目すぎて天寿には届かず急死した。ぼくがうろうろしている間に神田の書店が四国まで行って蔵書を買取ってしまった思い出が苦しい。

テレビの仕事は、幸い東京や大阪のテレビ局が健闘してくれて福岡では比較的ヒマだった。五十歳までに十冊分の原稿を書いておく、通史志向で行く、それが最初の主題だった。今回書き上げた文明渡來說は韓国については上田正昭・渡

来説以来、十分かと思われ、中国三波を選んだものだ。献辞は三十年の付き合いの王金林教授(元中国日本史学会会長・前浙江工商大学日本研究所長・南開大学出身)と六十年来の友人・陳榮芳兄(元中国翻訳家協会理事・日本東北大学理学部卒・台湾出身)に宛てた。王教授の令嬢王海燕さんは日本の複敬大学に留学し、現在は日本史研究者として浙江大勤務だ。将来に期待を抱かせる幸運を喜ぶ。

訪中から帰国して 十一月二十日記

何故、「魏志倭人伝」は解明できないか。

真説魏志倭人伝研究会・主筆



テーマを進めてきました。

「魏志倭人伝」の内容は日本の黎明期と深く関係していることが明らかであるのに、「こうではないか」と言われているという棚上げ状態のまま、国民的定説としては今なお解明されていません。にも拘わらず、いまだに「こうではないか」を投げかけるだけの研究者がほとんどなのです。立ち止まって「何故、解明できないか」を問うことを試みない限り、この現状を打破することはできません。その「問い」がなかったことが、「何故、解明できないか」の最大の原因だと言っても過言ではないのです。

「解明」を論じるならば、何をもって「解明」とするのかを定義しなければなりません。それは「魏志倭人伝」の叙述が、誰によつて、誰に向けて、何の為に、どのように書かれ

たのかを明確にすることに始まります。それを明確にして、後にはその「魏志倭人伝」が、誰に、何故、どのように影響を与えたのかを論じることが可能となります。また、そこに書かれた歴史認識をベースに、我が国の歴史をどうとらえ直すことができるようになったとき、ようやく「魏志倭人伝」の書籍的価値が明らかとなり、本当の意味で「解明」と言えるようになるでしょう。

そのためには、数多の「こうではないか」論が用いた視点なり方法論なりを振り返ってみることも必要かもしれません。しかしそのときに大切なのは、どの方法が「解明」に至ることのできる方法なのかを見極め、至ることのできないものを切り捨てていく消去法の作業であり、その見極めのための基準であり、基準となる研究指針の存在です。その新しい古代史学の研究指針として、これまでの講演会で岩元学説の研究指針を述べてきました。

大きな前提として、文献が書かれた当時の、当事者にとつての常識を理解することが必要です。特に古代東アジアの政治に關係する部分では、二元五行説や占星術、天文学は必須の素養となります。天文学に基づき「漢書」地理志倭人の条に書かれた「夫乘浪海中倭人分爲百餘國」を含む文言を正しく翻訳してこそ、それを底本とした「魏志」倭人伝の叙述が理解できるので。

ところが、岩元本「漢書」を国宝として所蔵する千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館でも正しい翻訳がなされておらず、日本の古代史学の進歩にとって非常に大きな足枷となっています。また何故、「漢書」の倭人の条に孔子の件を登場させたのか。それが分かると「倭人伝」の解明も進みます。

文献を記述する文字、つまり古代漢字についての理解は最重要と云つてよいかもしれません。真説魏志倭人伝研究会では許慎の「說文解字」とその注釈書である「說文解字注」(段玉裁)の漢字解釈を基礎にしています。古代漢字の理解

に基づいて「倭人伝」を訳しただけでも、従来説とは全く違った世界が描かれます。他にも、古代漢籍を解釈するために、中国の歴史に連続と続いた古文経系と今文経系という二大学派の対立を念頭に置くことや、文献相互の因果関係に注意することも大切です。

「倭人伝」時代の東アジアの国際関係も重要です。遼東で勢力を築いた公孫氏は、倭と韓を支配し、魏や呉と渡り合い、さらながら「四国時代」の様相を呈していました。公孫氏の綱渡りの外交こそが、「韓伝」や「倭人伝」の極意形成に関わっていることも忘れてはなりません。

現在、練馬での講演会は、「倭人伝」から日本の諸勢力の対立構図を浮かび上がらせ、「宋書」の「倭の五王」が卑彌呼の邪馬台国の系統であること、狗奴国の王が新羅王朝の系統を作り、日本海の出雲と結びついて邪馬台国系国邑群と対立したこと、そしてそれらの対立が「白村江」の敗戦と「壬申の乱」、「記紀」両史の編纂を経て万世一系の統一皇統を紡ぎだしたことなど、日本の黎明期を論じつつ、日本人のアイデンティティの再構築をも目指して進めています。

皆さん、是非とも練馬の講演会にお越しください。そして一緒に古代史学のパラダイムチェンジを進めていきませんか。「質問やご意見はいつでもお受け付けいたしております」。

【真説魏志倭人伝研究会事務局】

東京都練馬区豊玉北六丁目三の二槐山ビル3階

電話 03-5999-0705

ホームページ <http://gishinwajinden.net>

魏志倭人伝の解釈について

京都大学名誉教授

上田 正昭

『魏志倭人伝』は多言するまでもなく、西晋の陳壽が太康年間(二八〇—二八九)に撰述した、中国の『三国志』六五巻のなかの『魏志』三〇巻の東夷伝の一部である。したがっ

て、『魏志倭人伝』の用語の解釈は、『三国志』全体のなかで、陳壽がどのような理解のもとで使っているかをまず検討することが必要である。

たとえば、「其の國、本亦男子を以て王と爲し」と書いているのは、卑彌呼の死後「更に男王を立てし」と記しているのと関連する。もともとも亦男王であったが、「更に」男王を立てたけれどもの意味と解せられる。そして「住まること七・八十年、倭国乱る。相攻伐すること歴年、及び一女子を共立して王と爲す。名づけて卑彌呼と曰ふ、鬼道を事とし、能く衆を惑わす」と記載する。

『後漢書』はこの乱を「大乱」とし、その時期を「桓帝から(熹)帝の間(一四七—一八八)とし、『梁書』や『太平御覽』では、熹帝光和(年中、一七八—一八三)としぼっている。

ところでこの「共立」という用字を重視してこれを原始的民主制とか部族同盟の傍証とする説がある。はたして陳壽はそのような意味で「共立」と書いたであろうか。『三国志』東夷伝の夫余の条では、簡位居という王に嫡子がなく、王が死んだので庶子の麻余を「共立」したと述べる。さらに高句麗の条では、伯固という王が死んだが、長子の抜奇が「不肖」であったから小子の伊夷模を「共立」したと記述する。これらの「共立」は嫡子でない者が王となった場合に用いられていたことがわかる。

いままは原始的民主制や部族同盟のあかしとし重視するなら、卑彌呼の死後、一時男王が立ったとするさいに「男王を立てし」とあって「共立」とは書かず、赤女蓋身が女王となつたさいに「年十三なるを立てて王なし」とあって、なぜ「共立」と書かれていないのかを改めて問わなければならない。

また卑彌呼について「鬼道を事とし、能く衆を惑わすの『鬼道』を『後漢書』は「鬼神の道」と記載しているので、

それは「鬼神に事えて」の意味だとする説がある。この場合も陳壽がなにを指して「鬼道」と述べているかを『三国志』のなかで吟味しなければならない。『蜀志』劉焉伝には、張魯の母は「鬼道」をもつて、常に益州牧の劉焉の家に出入したとする。この張魯は道教の教団(五斗米道)を創始した張陵の孫である。五斗米道の流れをつく張魯の母の「鬼道」は明らかに道教であった。陳壽は卑彌呼の宗教乃至信仰を道教に類するものとみなして「鬼道」と表現しているとみなすことができればよい。

ただしだからというので卑彌呼のそれが、道教そのものであったと断言するわけにはいかない。なぜなら日本古代史の史料に道教に関連する信仰や思想は明らかにみえていて、教団道教の受容を物語る史料はなく、道士の史料はあっても、道観(道教の寺院)は発掘調査でも今のところまだみられないからである。

『魏志倭人伝』の解釈は、『三国志』の用字にそくして考察する必要がある。いまはその若干を指摘したにすぎない。私が「鬼道に事へて」とよまずに、「鬼道を事とし」とよんできたのもそれなりの理由がある。

考古学者の邪馬台国への夢

明治大学名誉教授 大塚 初重

私は二〇一五年十一月で教え九十歳、すなわち卒業を迎えた。さすがにこの歳になると自らトレンチに潜って発掘することは無理である。邪馬台国研究の最先頭に立つなどという思い込みもできる筈はない。

邪馬台国論は大いに燃えさかっているが、結論がでる見込みも立たず問題の所在さえ益々複雑化している現状である。

邪馬台国といえは中国の文献に登場する倭の一国名であり、彌漢から西晋に仕えた陳壽が自ら邪馬台国へ出張して書いた見聞記でもなく、女王卑彌呼に会った事実もない。しかし文

敵では舞台は北部九州の對馬国・一支国を経て、末慮国から伊都国・奴国・不彌国とあり、さらに邪馬台国から狗奴国へと展開する。

考古学的には「邪馬台国」とか「卑弥呼」と記載した文字資料が発掘されない限り、確証することは不可能である。一九六〇年代以後の日本での遺跡調査例の激増は、北部九州地方でも近畿地方でも膨大な資料の蓄積を見ており、発掘面積も拡大しているが、ここが邪馬台国だと確認できる資料はない。

佐賀県吉野ヶ里遺跡こそ「卑弥呼の里」として、一時騒然としたことがあったが、現在は静寂を保っている。一方、奈良県桜井市福向遺跡も邪馬台国に相応しいと報道されるがそのような確証はない。大型集落だとしても王都の佇まいが明確に示せるかが問題となろう。従って新井白石・本居宣長以来、延々と続いてきた邪馬台国の位置論争は、今後も長く続くものと予測している。

考古学的には二、三世紀の社会状況の中で、揺るぎない邪馬台国としての組織や運営を示す地域を証明し得るか否かである。現在までのところ邪馬台国を確認するための発掘が行なわれたことはない。また卑弥呼の墳墓を捜し求めて発掘した前例もない。すべて発掘の成果によってさまざまな評価がなされ、推定されているだけである。卑弥呼の居館だったのか、墳墓であったのかは、すべて推測なのであって事実の確認ではない。このことは考古学研究者自身がよく知っている筈である。

それにも拘らず邪馬台国とか卑弥呼に関係する重要遺跡だと認定するのは、多くの場合マスコミの報道姿勢は依るところが大きい。私自身も、講演会やシンポジウムで結局は、邪馬台国問題に関連した発言を求められることとなる。はっきり言うが魏志倭人伝の文言の解釈のみでは、邪馬台国の真実をつきとめることはできない。それはすべて推理・推測であり

自分流の解釈なのである。

考古学上の問題も同様であって、将来何時の日か偶然の機会として「魏倭王」の金印とか、甍升米が使節として貰ったであろう「銀印」とかが、発掘によって地上に露われることがない限り、推定の域を超えることはないであろう。

しかし研究は一步一歩進んでいる。かつて「卑弥呼の鏡」と考えられてきた三角縁神獸鏡が、舶載か仿製かの論点も決めかねているが、出土古墳はほとんどが古墳時代の前期前葉の前方後円(方)墳であり、その年代は三世紀末葉か四世紀前葉に求められる。二世紀中葉から三世紀中葉にかけてのいわゆる邪馬台国時代の墳丘墓から発見されている鏡は、三角縁神獸鏡ではないのである。地域を東国に限定して見ると、沼津市高尾山古墳や長野市弘法山古墳・中山三十六号墳、山梨県小平沢古墳、千葉県高部三十二号・三十号墳のように、上方作系半肉形式獸帯鏡や斜縁神獸鏡が出土しており、これらは何れも後漢鏡である。地域をさらに瀬戸内から四国にまで拡大すると、圖文帝神獸鏡・双頭龍文鏡・慶鳳鏡なども加わり、邪馬台国時代のかかり活発な対外交渉を認めなければならぬ。

三角縁神獸鏡はこれらの後漢鏡流入以後に製作された鏡であり、舶載・仿製の何れにしても倭人技術者のみで鏡鏡が開始できたとは思えない。中国の鏡鏡技術者の関与がなければ景初三年鏡や正始元年鏡の存在もなかったのではないだろうか。鏡の研究もお一層の進展が期待されるなかで、弥生時代後期から古墳時代出現期の鉄器の製作・所有状況も明らかになりつつある。瀬戸内・近畿地方のみでなく、近年では東海地方から関東地方にまで分布圏が拡大しつつあり、いまや東国の考古学情報を書き加えては、邪馬台国問題は前進しないであろう。

そしていま、何れともあれ沼津市高尾山古墳の築造・埋葬年代が最重要課題なのである。多量の出土土器についてはす

で大廓I式土器からIV式土器までが認められ、それらの土器の年代も示されている。古墳時代研究者のほとんどは二〇〇年〜二五〇年という年代の妥当性を承認しているのはなからうか。倭国内における各地の土器の集団的な移動も事実として認められていることから、東国だけではなく倭国の全土で地域的な人びとの移動・移住があったことは間違いない。恐らく軍事行動もあつたであろうが、海上・湖沼・河川の航行による活発な貿易や通商活動が行なわれていたことは間違いない。北陸系土器の拡散や東海系・近畿系土器の到達も政治的・経済的活動の背景を物語っているものであろう。思えば二、三世紀の邪馬台国時代に九州や畿内地方が列島内で新しい社会の動きの渦中にあつたのかも知れないが、伊都国・奴国が対外通商の拠点であつたことも事実であろう。相当数の庄内式・布留式土器がこの地域の集落遺跡から出土していることは、単に畿内勢力による政治圧としての現象と見るよりは、対朝鮮半島や中国との貿易交渉の窓口であつた可能性が強いように思われる。

新しい考古学資料は整理・研究が進めば増加することは必然であり、新見解が提起されることも間違いない。

私が考古学の道に入った一九四六年から七十年が経過した。その間、邪馬台国論も大きく前進した。これからの五十年後ほどのような理解になっているのだろうか。空前の大発見、新資料の出土によって一挙に位置論が解決するのかも知れないが、これは夢のような話かも知れない。

やはり多くの人は邪馬台国の謎に向ってこれからも研究を進めていくのであろう。これほどまで古代史の謎に立ち向う国民は外にはないと思う。韓国や中国の考古学研究者は云う「日本の皆さんはほんとうに歴史好きですね」「こんなに多くの講演会やシンポジウムのある国も珍しい」。日本の古代史研究は一般の関心のある皆さんに支えられているといつてよいのであろう。

倭国王帥升はヤマト国王か

大阪市立大学准教授 岸本 直文

二〇一五年四月の考古学研究会大会で、C十四年代による年代観を考古資料から検証する機会があり、十二月刊行予定の『考古学研究』に掲載されます。

そこでは北部九州優位から畿内ヤマト国優位の転換は一世紀と二世紀の間にあること、五七年奴国王の冊封から五〇年後の二〇七年には、倭国という連帯ができておき、後漢王朝から倭国王が冊封されるが、タイミングは合致していません。一世紀にはけい社会が変動するのは東洋社会であり、この間の変化をもたらしたのは北部九州でなく東洋社会であり、それが倭国を生み出す原動力になったと思われる。です。一〇七年倭国王帥升はヤマト国王であっておかしくないと示唆しました。「其の国、もまた男子をもって王となす。とどまるところ七十八年、倭国乱れ、共に一女子を立てて王と為す」という倭国王の系譜の記載も、代表者としての倭国王(ヤマト国王)から諸王権の上に立つ倭国王へと昇華する連続性として理解しやすい。畿内いけば、卑弥呼の出身は不明だが、畿内ヤマト国に居住しているのがヤマト国の人物と考えているが、いずれにしても倭国が二世紀以来、ヤマト国を本拠地とするという意味での連続性を、倭人伝は伝えていていると思います。

邪馬台国問題の課題

大東文化大学名誉教授 小林 敏男

筆者はすでに明らかにしたように(※)、卑弥呼・巻(百)与二代の女王をだした女王国(北九州ヤマト国、筑後山門郡が中心)と七戸を擁した新興邪馬台国(畿内ヤマト、男王国)とを別個の国として論じた。これに行程記事にみる里数記事(中国人の距離観)と日数記事(倭人の距離観)の質的な差違を出発点としている。この点は陳寿の行程記事がかな

らずしも正確なものでなく、例えば『魏略』や『広志』なども含めて手元にあつた複数の行程記事を点検したものであることが考えられる。したがって、陳寿が『魏志』を編纂する上で、どのような資料をもとにどのようにして行程記事を作成したかが課題となる。

次に政治地図ともいべき女王国、邪馬台国、倭国との関係である。筆者は、対馬国以下不弥国までの北九州沿岸の六ヶ国とヤマト国(女王をだした宗主国)の七ヶ国がヤマト国の卑弥呼を共立した女王国連合とみている。この女王国連合体が周辺の斯馬国以下二十一ヶ国(戸数道里を略載した)にも支配力を及ぼし、「倭国」を形成した。卑弥呼は倭国王でもある。一方、畿内には男王国である大邪馬台国があり、又五戸を擁する投馬国(出雲地方)があり、女王国(ヤマト国)の南には狗奴国(熊襲地方)があつたことが『魏志』からは窺える。いわば倭国の大乱以降、三世紀は日本列島は複数の強国が対立し、連合し、均衡を保っている状態であつた。

第四、二十一ヶ国をどこに比定するかは難題であるが、筆者は伊国、中国地方までも含めて考えるべきだと思つている。また伊都国におかれた「大率」の設置も難題で、その性格設置主体(邪馬台国か、葦方郡か、女王国か)も興味深い。

次に卑弥呼像については、畿内説では葦蓋伝説をもつヤマトトトヒモモン姫、北九州説では神功皇后に誅された山門県の田油津姫(神功皇后紀)が卑弥呼像を形成する上で参考になるが、どちらも悲劇の人物であつた。

なんといっても最大の課題は、女王国、邪馬台国の行方である。邪馬台国問題とは、畿内の初期ヤマト政権が日本列島に覇権を確立するまでの空白の四世紀を含めた問題である。とくに北九州女王国説の場合、巻王の時の東遷、巻王以降の東遷、あるいは女王国を打倒した狗奴国の東遷の議論が神武東遷伝説とからんで議論されているが、今のところこの時期(三世紀後半)の東遷は無理だろうとみている。東遷を考え

るなら、倭国の大乱の時期(二世紀後半)か、それ以前に北九州勢力の畿内ヤマトへの移動を考えざるべきであろう。

筆者は、『日本書紀』の景行天皇紀、神功皇后紀を参考にしているが、女王国は南の狗奴国(熊襲)の勢いにおかれて縮小し、あるいは力を失い、やがて畿内の邪馬台国の発展した初期ヤマト政権に征服され、その歴史の幕を閉じたとみている。このあたりは記紀の活用が可能であるがどうかをふくめて、巻王以降の空白の時代をどのように復元できるか、ふるくて新しい今なお解決されていない難題である。さしあつて、三三三、四年の高句麗による桑津郡、葦方郡の滅亡事件が一つの面影となる。

なお、研究史としては、明治以降、戦前の大家の邪馬台国論はまずおさえておくべきであろう(佐伯有清「邪馬台国論争」岩波新書参照)。

*拙著『日本古代国家の形成』第一章「邪馬台国と女王国」第二章「統一、邪馬台国と女王国」古川弘文館、二〇〇七年。

「邪馬台国論争の忘れもの」

歴史作家 関 裕二

見直される「西から東」
「邪馬台国論争大好き人間」の集まりの中で、自説を述べるのは、恐怖なのである。甲論乙駁、侃々諤々、その議論の中に割って入れれば、至る場所からパンチが飛んできそうではないか。くわばらくわばら。

だが、勇気を振り絞って、筆者の立場を明記しておかなければなるまい。

結論は簡単。卑弥呼の邪馬台国は福岡県久留米市の高良山周辺にあつたが、しばらくして、畿内には「ヤマト」が成立して、北部九州と畿内は、主導権争いを演じていたと危うのだ。日の出の勢いのヤマトに対し、劣勢に立たされた卑弥呼は、朝鮮半島に逃出してきた魏に対し、「われわれがヤ

「マト」と報告したのだらう。「本物のヤマト(大和)」を出し抜き、外交戦で優位に立とうという目論見だ。すでに江戸時代、本居宣長が唱えていた「偽倭説」に、考古学の資料を当てはめて、こういう結論となった。

もちろん、奈良県桜井市の箸墓(箸中山古墳)が三世紀半ばの造営だと主張しているわけではなく、その一方で、弥生時代に富を蓄えていた北部九州が、なぜか主導権を發揮できないまま埋没してしまった謎に対するヒントが隠されていると思うのだ。

纏向遺跡の時代、土器の移動の痕跡から、人びとは「東海から畿内」・「畿内や山陰から西」に向かっていたことが分かっている。纏向に北部九州の影響がほとんどなく、吉備、山陰、東海などの階層力がヤマトに集まっていたという事実もある。かつて信じられていたような、「北部九州からヤマト」、「西から東へ」というベクトルは、疑ってかかる必要が出て来たのだ。

八世紀から逆算した邪馬台国論争

邪馬台国論争の忘れものは、二つあると思う。ひとつは、八世紀から逆算した邪馬台国論争だ。西暦七二〇年に編纂された『日本書紀』を、軽視してきたことに対する反省である。

「存知のように、神功皇后撰政紀に、『魏志倭人伝』の引用記事がある。『日本書紀』編者が「神功皇后は邪馬台国の人」と考えていたのか、あるいは「もともと神功皇后は架空の人物だから、『日本書紀』編者は無理矢理両者を結びつけた」と断り捨てることも可能だ。もちろん史学者たちは、あの考えでうなずき合っている。しかし、この記事の中に、邪馬台国論争解決のための重要なヒントが隠されていたかと思えない。

『日本書紀』編者は、ヤマト連国の歴史を熟知して、

だからこそ、肝心な場面を神話にすり替え、知っていることも「知りません」と白を切り、歴史隠蔽のための矛盾だらけの脱話を用意したのではなかったか。そして、なぜ『日本書紀』が邪馬台国隠しをしなければならなかったのか、その理由が分かれば、意外にすんなり、邪馬台国論争にけりはつくのではないかと考えている。

神功皇后は第十五代応神天皇の母だから、当然四世紀後半ごろの人物とみなされている。しかし、神功皇后は日本海づたいに北部九州に乗り込み、山門(福岡岡みやま市)の女首長を滅ぼして、九州遠征を終えている。「ヤマト(山門)の女首長を殺したヤマト(大和)の神功皇后がトヨの女神と接点を持っていた」から、無視できないのだ。山口県にある神功皇后の宮は「豊浦宮」で、「トヨの港の宮」だ。「トヨの女神」で思いつくのは海幸山幸神話の豊玉姫だが、豊玉姫は山幸彦に潮瀧瓊・潮瀧瓊を授け、神功皇后も豊浦宮で海神から同じ玉を授かっている。神功皇后は「トヨ」といたる場面ではつながらているが、要するに神功皇后自身が「台与」で、山門の女首長(卑弥呼)を滅ぼしたあと、その宗女を名乗り(そうしなければ、親魏倭王を殺した魏の敵になる)、九州に居座ったのではなかったか。筆者は、神功皇后は邪馬台国潰しのためにヤマトから送り込まれた女傑とみる。

北部九州沿岸部を代表する安曇氏のその後

神功皇后は新羅征討に向かう時、志賀島で磯良丸を見出し、味方に引き入れている。この男は、安曇氏の祖だ。安曇氏は「奴国」から志岐、対馬といった、朝鮮半島と日本列島を結ぶ水運に生きた氏族で、北部九州沿岸部の中心的存在だった。この伝承も無視できない。

神功皇后は北部九州沿岸地帯の恭順を引き出し、最後まで抵抗を続けた邪馬台国(山門)の卑弥呼を滅ぼし、入れ替わって北部九州に君臨したのだらう。これではミイラ取りがミイ

ラになったようなもので、結局神功皇后はヤマトに裏切られ、南部九州に逃れ、その後奸余曲折を経て彼女の末裔がヤマトに呼び出され即位した……。そしてこれが、天孫降臨神話と神武東征に書き替えられたとみる。

謎めくのは、「北部九州のその後」のことだ。富を蓄え来っていた北部九州は、その後どうなったのだらう。これが、邪馬台国論争の二つ目の忘れものだ。

答えは、安曇氏が握っているように思えてならない。彼らは、海の民として、日本各地に散らばり、独自のネットワークを構築していったのだらう。北部九州は政治的な主導権は失ったが、通商とネットワークによって、目に見えない活躍を続けたのではあるまいか。

熊本と邪馬台国

元九州考古学会会長 島津 義昭

1 「邪馬台国」の登場

「邪馬台国」は日本列島内にあった「国」である。この「国」を知る史料、『三國志』魏志 卷三十東夷伝・倭人魏志・倭人伝』は、わずかに二千余字であるが、三世紀の倭の社会が詳細に書かれ極めて貴重である。

中国では二〇〇年に後漢が滅び、魏・呉・蜀が覇権を競う三國時代を迎えた。「倭の女王卑弥呼」は二二九年魏に使節を送り、魏王から「親魏倭王」の称号と銅鏡を送られた。「倭」について述べられている中国史料は、ほかに『後漢書』卷二東夷伝・倭伝(後漢書・倭伝)を始め、中国五代・晋時代の『旧唐書』まで十本の正史があり、そこでは「倭・倭人・倭国」として日本が登場する。

『三國志』魏志』と『後漢書』とを比べると、中国内での国の成立は、後漢(紀元二五〇年から二〇〇年)、魏(紀元二二〇年から二六五年)である。つまり後漢の後に魏がくるのであるが、編纂された時期は逆に『魏志』倭人伝』がほうが古

く、『後漢書・倭伝』がおおよそ五十年前ほど新しい。『後漢書』の多くの記事は『魏志』を参考にしているが、逆に『後漢書』だけにしかない記事もあり貴重である。

『後漢書・倭伝』や『魏志・倭人伝』の存在は、古くから知られており、養老四年(七二〇)になった『日本書紀』では、神功皇后は卑弥呼としている。江戸時代には、明治以降の『魏志・倭人伝』の諸説が全て出揃う。

福岡藩に出仕の儒者、亀井南冥が天明四年(一七八四)、博多湾の志賀島で発見された「金印」について、いち早く『金印弁』『金印弁或問』を著し、この金印が『後漢書・倭伝』の建武中元二年(五七)記事、つまり光武帝が奴国王から賜った「印綬」に相当すると考えた。調書を知人である上田正秋などに送り、「金印」出土は広く知られることとなった。「金印」は黒田氏所蔵することとなり、福岡市博物館で広く公開されている。亀井南冥の金印についての洞察が、今日まで保存されるきっかけを作ったといえる。

「邪馬台国」について、国学思想の形成に強い影響を与えた本居宣長は、皇国史観の立場から朝廷が戎(えびす)の国と交渉することはあり得ず、御(取)すべきだとする主張を『取戎(取)』で表した。このなかで、『魏志・倭人伝』の魏に使役を送った者は「熊襲(くまざい)の類」であり朝廷を備つて、このような「邪馬台国」は筑紫(九州)にあるとした。九州説のはじまりである。

明治時代以降、「邪馬台国」の所在地については、畿内説と九州説があり、多くの論争が発表された。前者は主に京都大学、後者は東京大学関連研究者により論争が開始された。九州説の代表は東大教授で東洋史学者の白鳥摩吉で、その反対者は京都大学の内藤湖南であった。白鳥は『魏志・倭人伝』の方位・里程・地名を検討し、「邪馬台国」は「不弥国」の南に位置するとした。その後の論争では『魏志・倭人伝』の距離や方角の記事を、どのようにして比定地に結びつける

か多様な説が出された。いわば合理的説明法の優位を競うものであった。

大正期には饒鑑研究者の富岡謙蔵や高橋健自は、遺物・遺構の解釈をもつて論争に発言した。東洋史の橋本増吉は考古資料は移動することから批判し、「邪馬台国」は筑後山門(福岡県柳川市・みやま市)とした。

このような状況に対しマルクス主義の立場から「歴史の名によってひたすら天皇制の礼拝と軍国精神の宣揚を心掛けた固定の歴史に対し、在るがままに歴史的過去を把握、現在を理解し、将来を展望する歴史科学」として『日本歴史教程』が出版された。渡部義通・伊豆公夫・早川二郎・三澤章の共著として、一九三六年に初版が刊行され、敗戦後いち早く一九四八年に重版された。

著者のひとり三澤は、考古学者、和島誠一であり、史的唯物論の立場から書かれた、最も優れた通史となっている。『日本歴史教程 第一冊』で伊豆は「八章原始社会の崩壊・邪馬臺國の状態」で、「邪馬台国」の所在については不明として「学界の進歩と協力して解決に努力し、考古学的研究の発展に期待する」として、いち早く「邪馬台国論」に対する考古学への期待が表明されていた。

2 「邪馬台国」への国民の関心

「邪馬台国」の所在地について、敗戦後広く国民の関心をよぶきっかけとなったのは、藤間生大「埋もれた金印」(岩波新書)である。第一版は一九五〇年に刊行された。「女王卑弥呼と日本の黎明」、第二版は二十年後の刊行で「日本国家の成立」の副題をもつ。第一版は初級用、第二版は中級用と藤間は位置づけていた。

特に第一版の古代・中世・近世・近代の「邪馬台国」にたいする考え(方志史)は詳しい。この本によって邪馬台国への関心と理解を深めたといえる。これまでの「邪馬台国論」

と異なり、社会・経済・政治さらには思想を総合的に論じた。考古学分野にたいする注文として「文献を主とする人々の間で行われる議論・現実によって文献を解釈するのではなく、文献を現実にあわせるやり方は考古学者を許しさせた」として、考古学に対する弁護と激励を表明した。藤間は「邪馬台国」の所在地を福岡県南部筑後であるとしている。

一九六〇年の後半から始まった『日本の歴史』として刊行された井上光貞「神話から歴史へ」は、民族学者の大林太良、考古学者の森浩一を執筆協力者として、わかり易い文章と図表を多用した構成で、歴史物としては文庫版も併せて百万部を超す、ベストセラーとなった。「邪馬台国」論争にも多くのページを当て邪馬台国の所在地を「筑後から肥後北部」とした。また、一九六七年、島原鉄道重役で作家の宮崎康平は「まぼろしの邪馬台国」を著した。従来の古代史に対する考え方を払拭し新しい視点をもち、「邪馬台国」の所在地を島原半島(諫早湾一帯)とする意義をつく比定であった。十年後のインタビューで「私の考える邪馬台国で、邪馬台国はほかにもあるだろう、皆さまのお探みなさる」といいと述べた。神話に出てくる神々を従来の「文字」による理解の仕方否定し、「発音」で理解する仕方は宮崎の方法であった。目が不自由であった宮崎(への和子夫人)の協力は感動的である。考古学の面から、富樫卯三郎、乙益重隆が協力した。本の刊行は専門学者以外に「邪馬台国」論争にひとびとが参加するきっかけとなった。

一九七一年、古田武彦が「邪馬台国」はなく「邪馬一國」であるとして注目を集めた。一九七六年松本清張は従来の研究を新しく改定加筆して『清張通史1 邪馬台国』を刊行した。「邪馬台国」については北九州(筑後)と想定した。一九七八年『邪馬台国の探究』——卑弥呼の王国はどこにあったか?が刊行され、邪馬台国ファン注目の注目をあつめた。

一九七九年、『季刊・邪馬台国』が発刊を開始した。刊行

部数は二万部余であるという。研究者の論文ばかりでなく、多くのひとが意見を述べる交流雑誌となっている。

3 考古学は邪馬台国をどうとらえてきたか

敗戦後、考古学の立場から、六十年をかけて中国、九州を中心とする調査を行ってきた九州大学、岡崎数は一九七一年論文「日本考古学の方法」の中で、「邪馬台国の時代」という章を設け、「邪馬台国研究の基礎作業として、日本各地ごとに九州・瀬戸内・畿内などにおける弥生後期からの土師器の細目を細分し、その集落と墓地における平行関係を明らかにすることが必要」であると提言した。つまり、各地の社会に動きを時間軸の中でとらえていくという方法である。上記の研究は進み、今日九州・瀬戸内・畿内の土器様式での時間的な平行関係を示す網は完成しつつある。

一九八六年から始まった佐賀県神埼郡吉野ヶ里町・神埼市にまたがる吉野ヶ里遺跡は三百ヘクタールの及ぶ大遺跡で、外側に二重の濠をもち北に二世紀から三世紀に及ぶ墓(墳丘墓)がある。濠やその内側に「宮室・楼観・城柵」とみられる建物跡があり、「魏志・倭人伝」の記事を彷彿させた。文献のうけだけであった「邪馬台国」時代の実態を具体的に推測できるようになった。なお、吉野ヶ里遺跡の初期の調査を進めた高島忠平は、「邪馬台国」九州説の代表的な主張者であり、多くの企画で畿内説論者と意見を交わしている。

4 邪馬台国と熊本

ここで筆者の住む熊本県の事例をあげよう。県内に「邪馬台国」の存在を考える説は江戸期からある。幕末から明治期にかけて長州藩校・明倫館の教官であり維新後は宮内庁文学御用掛となった国学者・近藤芳樹は一八四六年「征韓起源」を著した。この中では本居宣長の説を引き、「卑弥呼」は熊襲代々の女王の通称と考え、「邪馬台国」が日向・大隅・肥後



のどこかにあるとし、「和名抄」の菊池郡山門郷とした。同時に、益城・阿蘇・菊池・純麻の四郡は日向に属していたとみている。「邪馬台国」を肥後菊池説のはじまりである。「姓氏家系大辞典」を編集した太田亮は、やはり不弥国の南、千三百里(三十六里)で、七万戸をいれうる地域は菊池郡だとして山門郷を「邪馬台国」とした。

一方、「東アジアの古代文化を考える会」や「平達」などの市民運動に活躍した鈴木武衛は、菊池川中流の山鹿市に「邪馬台国」を比定した。その根拠は太宰府天満宮に伝世されている国宝の「輸范」である。これは唐の張姓金の撰、雍公叙が註したものであるが、その「廣志」引用部には、一個所「又南至邪馬臺国」とあるが「邪馬臺国」は今の「山鹿」と解釈したものである。

菊池川流域は、熊本県内では有数の古墳の密集地で有力古墳も多い。そのひとつと水町船山古墳からは百点を超える遺物を出土したが、東京国立博物館の古谷清はこれを天照大神・卑弥呼が重臣の「家」とみた。金思輝は、『トンカラ・リンと狗奴国の謎』で船山古墳近くの、隧道「トンカラリン」を魏志・高句麗伝と結びつけ、鬼道が行なわれた場所とした。言語学者の服部四郎は「邪馬台国はどこか」で「奴国」から、実際に道をたどり「投馬国」を久留米市朝妻として、その「邪馬台国」は熊本市水前寺とした。平地部は海であっ

たので、高台にある熊本県庁も含まれる。

安藤正道は「邪馬台国」をサマタとよみ上益城郡美里町佐俣とした。藤井甚太郎は、不彌国から「邪馬台国」までを三六里として熊本県内とした。熊本大学工学部の藤芳純男は一九六八年「倭日の国」邪馬台女王国の解明で、卑弥呼の国は銅剣・銅矛などの青銅器出土地帯の南にあたる「阿蘇南方説」を提唱。上益城郡山門郷(蘇陽)から宮崎県高千穂町を「邪馬台国」とした。渡辺豊和は「地球幾何学」で、地表を一枚の紙とみる見方で複部制を持ち阿蘇と松橋に「邪馬台国」の都があつたとした。西川勝は「邪馬台国」の二女王は阿蘇神の「比咩御子神」が「卑弥呼」、「彌比咩」を「苞与」に比定し、「卑弥呼」の「家」は、高森町草部吉見神社の西にある「土行松古墳」とした。「妙見社」と結びつけ八代に比定する説や、球磨郡説もある。

また、直接に「邪馬台国」の所在論ではないが同時期に存在した「国」(魏志・倭人伝)について、宮崎康平は「魏志・倭人伝」の多くの「国」のうち十か国を熊本県内に比定した。鈴木一郎も「鬼奴国」をキナとよみ「玉名」に比定している。「狗奴国」が熊本にあったという説も有力である。菊池秀夫は二〇〇〇年「邪馬台国と狗奴国と鉄」を著し、熊本県菊池が「狗奴国」であると示した。その根拠は男王の名前「狗古智卑狗」をククヒコと読むことである。「倭名抄」では久々知と記している。また、「狗奴国」領域での鉄の多さにも注目した。

村上泰通の研究によると弥生時代の鍛冶工場の発見数は全国で最も多く鉄の使用がかなり進んでいることがわかる。菊池地域を「狗奴国」に比定できる可能性は高い。「邪馬台国」は、その北、熊本北部を含む北九州となる。

5 今後の邪馬台国論争

「邪馬台国」については、中学校の教科書でもとり上げて

いるが、その所在地については、九州と畿内をはじめ六十余カ所の比定地がある。それぞれの論者の思いが表明されている。二〇一一年には「邪馬台国研究大会」が早稲田大学を会場として開かれた。今年、二〇一四年四月には全国各地の「邪馬台国研究会」を統合した「全国邪馬台国連絡協議会」が正式発足した。「邪馬台国」をテーマにする講演会は大盛況である。

「邪馬台国」にかかわることで、日本歴史やふるさとの史跡に関心が深まるのは結構なことである。邪馬台国研究千三百年の研究の歴史に加えて今後どのように成果が積み重ねられていくのか、楽しみである。

近畿説をとれば、既に三世紀に畿内から九州に及ぶ広域の政治的連合が成立していたことになる。しかし弥生時代の「国」を示す遺跡(環濠遺跡)は九州内でも三十カ所以上あるのである。「邪馬台国」は初期の日本列島の「国家」の姿を考える上で、大切な素材である。

(本稿は雑誌KUMAMOTO熊本出版文化社)に掲載したものを改訂したものである)

(しまつよしあき 筑城大学芸術学部講師)

歴史資料の取扱姿勢

日本愛国学会会長 宝賀 寿男

一 当時、東大助教教授であった井上光貞氏の『神話から歴史へ』(中央公論社、日本の歴史シリーズ第一巻)がベストセラーとなっていた昭和四〇年代初頭からちょうど半世紀経過するが、その頃から古代史を中心に歴史関連の動きを見てきた。この間、井上博士から新進の考古学者とされて同著に関与した森浩一氏も既に、各々の著作第一作初版本から私が見てきた安本美典・古田武彦氏にあっても、先日、古田氏の計報がいわれたから、やはり相当に長い期間が経過したのだと実

感ずる。

ところで、その古田氏と二十年前に懇談したことがある。当時、富山県で勤務していた私のもとに何故かお出でになり、教時間、地元料理をつつきながら話した次第である。その後、最後に、私は、『東日流外三郡誌』の肩入れはもうお止めになったほうがよいのではないかと言ったところ、憤然として自分の判断でやっていることを他人にとやかく言われたくないという趣旨をいわれた。このためか、その後の接触はまったくないのだが、結局は、この問題が彼の命取りのような形になってしまったように思われる。

いまでは、同書は近代の偽書としての評価は確定したのではないかと思われるが、内容は勿論のこと、同書編纂に関与したとされる秋田孝季なる者の実在性に疑問が大きいというのが、私の見方であった。ところが、同様に実在性におおいに疑問がある「裨田阿禮」なる者が関与したと序文におおいに「古事記」については、一部に偽書説が根強いものそれが大勢となっていないかという不思議さがある(同書の内容まで偽書だと排斥するつもりはない)。記載される人々の真付けがまったくない『海部氏系図』が、古代氏族系図に無知な人々により国至指定され、それがそのままというの、不思議である。考古学界では、五百面超の出土が列島内にある一方、大陸・朝鮮半島からは一面の出土がない三角縁神獣鏡(ときどき、インチキ鏡の出現情報がいわれるが)について、いまだ魏統説を固守する考古学者が多いのも不思議なものであるが、歴史資料について、具体的な真付けを踏まえて、客観的総合的に評価する姿勢が学界にどれだけの問題であるか。

二 戦後の歴史学者の多くが信奉する津田学説でも、要は様々

な歴史資料を合理的、厳密に考えて、理に合わないものを非難するという姿勢が重要であって、これこそ根底の最重要認識であったはずである。ところが、当時の学問レベルで視野の狭い津田博士の出した誤った結論の多くを、そのまま受けとめた論調が戦後の学界に風靡してきたのは困った問題である。まったく不適切、不十分な立証しかされていない記紀などの造作論や反映説、古代氏族の系譜擬制論など、とても科学的論理的思考だとはいえない。こうしたものが学界に未だ多いのは、津田学説の悪影響とも言えよう。

九州の「熊襲」を「球磨十磨」の合成と考え、南九州の華人種族の前身とみたのも、津田博士の誤りの一つであった。こんな近代の単語合成の知識・用法が、古代人であったのだろうか。クマとソオでは、種族は同じであっても葬送方式など習俗が異なり、またまった一つの勢力圏を形成しなかったのに、誰がそうした近代的な命名をしたのだろうか。先の造作説や系譜架上説と同様、古代人の能力を過剰評価しすぎているとしか言いようがない。熊襲については、古田氏は、素朴な歴史観ながら、文献解説から正しく北九州の勢力と判断している(熊襲は華人ではない、匈奴国でもない)。だから、彼の邪馬台国説も九州王朝説も疑問大ながら、古田氏の問題提起を評価する面も私にはある。

この辺までで何が言いたいのかというと、考古学を含む歴史学界にあつては、報道のSWIHDという要素を的確に踏まえた具体的な立証をもとに考えていくべきだということである。この基本を踏まえる研究の必要性が強く、検察官が被疑者の犯罪を立証するために押さえていく「7何の法則」とか「7何の法則」というものとも合致する。かつ、研究者の配慮が足りない祭祀・習俗という面も十分踏まえ、東アジアという広い視点で物事を考えるということも必要である。そうすれば、大陸の魏朝で薄葬令がでているなか、倭国が蓄墓古墳のような巨大古墳を造るはずがないということも分かるは

ずである。

最後に、現在のネット社会を踏まえて、一つ余談的なものをあけておく。

「Yahoo!ブログ」のなかに「真実明朗」氏のブログ

「古代史、邪馬台国関係本のランキング」などがある

(アドレスが

<http://blogs.yahoo.co.jp/mocry397/MIM00/yolo.html>)

きわめて過激な言葉で、邪馬台国問題関係者への批判を繰り返しており、書き殴りで誤記・誤解も多いが、ときに正確に近いものもあるかもしれない。遊びの気持ちで冷やかに覗いて見てみてください。

(二〇一五年十一月月中旬に記)

わが圖書を語る

邪馬壹国は阿波・徳島

出版社 教育出版センター

価格 五百円(税別)

著者名 梨目 正



俄かに信じ難いとは思いますが、邪馬壹国が阿波・徳島であることは、先月「歴史でまちづくり推進協議会」より発刊された、この出版物により、完全に証明されています。

この出版物は、おもて面で邪馬壹国の位置を数学的論法により証明し、うら面での位置が、魏志倭人伝と矛盾なく、整合性が取れているかを、文献地理学と数学によって検証した内容となっています。全国邪馬台国協議会の会員の皆様も、このパンフレットをグループアースで検証し、邪馬台国の比

定地論争が終わったことを、ご自身で確認してみてください。尚、以下にはこの印刷物の驚くべき内容を、簡条書きで掲載します。

①卑弥呼の居た場所(所山町神領)までも、ピンポイントで証明している。

②倭国(種子島)を数字で証明している。

③周旋五千里も、数字と地理学により証明している。

④後漢書の奴国までも、数字と地理学で証明している。

⑤投馬国・狗奴国なども文献地理学等で、著している。

⑥邪馬台国の地名も著している。等々……

第一回会員研究発表大会概要報告

魏志倭人伝の「道里」に関する新考察

伊藤 雅文

陳寿と同時代に生き、ともに西晋に仕えた斐秀の作成した『高麗地城図』の序文に、「道里」とは「距離」のことであると明記されています。当時であれば、「具体的な里数」によって表されるべきものです。

そして、陳寿は「魏志倭人伝」に、邪馬台国以北の国々については「道里」を略載できたと明言しています。当然、この「道里」は、『高麗地城図』序文に記されたものと同じ定義のもとに用いられた単語のはずです。

だから、私は、不彌国から投馬国への「水行二十日」、投馬国から邪馬台国への「水行十日」「陸行一月」という日数表記の箇所、陳寿は明確な「道里」＝「里数」を記していたはずだと考えます。

しかし、陳寿の記した具体的な里数は、後世、おそらく宋の時代に、日数へと書き換えられたと考えられます。このいわゆる「後世改ざん説」の背景には、范曄『後漢書』におけ

る「金稽東治」とした誤脱や、五世紀前半に河内王朝から宋へ遣わされた倭王璽の使者に対する歌取記録があったと考えています。

※詳細は全邪馬運ホームページ「私の邪馬台国論」に掲載中です。

邪馬台国九州北上帰説

松尾 定行(ペンネーム 和田 潤)

「水行二十日、水行十日陸行一月」に「三〇〇里足らず」という矛盾に満ち満ちた「倭人伝」の記述、先人の皆様が大いに苦勞された「日数」「距離」の難問を、私は「九州北上帰帰」という着想で解決しました。でも動かなかった「距離・方位・日数の謎」が動いたので。

江戸期以来の定説に抵抗して、一大国を五島列島北端の半久島、末盧国を今の糸島市、伊都国を宗像市・福津市、奴国を北九州市およびその飛び地として博多・福岡、不彌国を下関市に比定し、さらに三世紀の年表を作成することで台身が晋使の訪使を強く求めた、晋使を狗奴国(今の出水市および伊佐市大口)への威嚇に利用したと考えた結果、「距離」「方位」「日数」の難問が同時に、ほとんど矛盾なく、きれいに水解決しました。

① 晋方郡(邪馬台国のうち「渡海」「水行」は帆船。② 邪馬台国(今の志布志市は機でこく丸木槳機造船。③

「渡海」千余里は一日で航行します。そして「野生号」による航海実験で得られた一日十八・五キロを④に適用して、不彌国(投馬国(今の西都原市)「水行二十日」です。邪馬台国と投馬国での滞在日数を各二日とします。

西都原市(志布志市)が「水行」六、七日、今の出水市(朝倉市)が帆船で三日。都城盆地・小林盆地・大口盆地の「陸行」に十四日(日に平均六時間、平均時速一・五キロ)、朝倉市(杷木)邪馬台国の「陸行」に十四日(日に平均五時

間、平均時速一・四キロ)です。

「倭人伝」のいう「余里」に実数をあてて合計三〇〇里とすることで不備なく邪馬台国は一〇〇〇里となります。

邪馬台国は今の大分県宇佐市にありました。

大和に崇神王朝はなかった。

邪馬台国は大伽耶の前身

福島 巖

天照の出雲の國驅りの後、出雲国から引き上げた國つ神系の大量の人々が出身地の高麗に戻って行ったため土地や食料が無く大混乱に陥った。男の武力で解決できず卑弥呼の靈力で解決できた。

邪馬台国の誕生である。その後、彼らの努力で鉄の生産が軌道にのり国も大伽耶国に発展した。

二ニギの孫イワレヒコが筑紫糸島に天孫降臨出し神武朝(伊都国)を作った。神武以下崇神まで十代続くが祭祀を行うのみで外部への影響力の少ない国であった。

一方鉄の拡販のためツヌガアラシトが三〇〇年頃高麗から但馬にやってくる。かれら一族が丹波経由の難波への鉄輸送ルートを開発した。この時日本海側と丹後が最も繁栄した。アラシトの五世孫がタジマモリで景行天皇になった。その息子がタケルであり仲哀天皇である。

彼が日本国をまとめ上げた中心人物であった。

この時神武系と景行などのツヌガ系系の二系列の王朝があった。景行と開化、崇神と仲哀、垂仁(架空)と応神は同世代の関係。これを一本に一本にたため垂仁の後景行が続く矛盾に満ちた歴史になっている。

崇神の業績、四道將軍派遣はタケルのやったこと、疫病をタネコを見つけて解決したのは五十年前のことであり、垂仁の内容は応神のやったことのコピーそのままの上、景行を生み出すための架空人物である。

蘇我系のタケル II 武内宿禰の存在を隠すため、記紀は殺したり別の名前で蘇生させたり複雑にしている。

タケル・成務・仲哀・武内宿禰は全て同一人物である。

会員研究発表の要旨：系図解説とは何か。

米田 喜彦

◎古代史解明のアプローチとして、系図の解説から、記紀の記述に対して、いくつかを紹介しました。

①「母と妻が姉妹である」という関係性を記紀から抜き出して、系図的に紹介しました。

②「支配者の平均世代交代年数」は、約三十年である。三十歳で子供を作り、六十歳で、隱居(死亡)という男系の平均的な世代交代のサイクルが見えてきます。

③日本書紀の孝靈天皇から弘文天皇までの在位年数は、仲哀天皇即位年を基準として、シンメトリーである。

一丁目：一三三三六十年六十八年九十九年一三二二年
二丁目：四八一年と四八一(三十七×十三)年。

一丁目目は、「十六/YXRFBR」氏の発見です。
二丁目目は、MARISHI氏の「三十七倍数論」です。

この二種類のシンメトリー性から、日本書紀は、緻密な設計図に基づいて(干支を利用しつつ)年代と在位年数が作られていることが分かります。

④記紀の系図解説では、「母と妻が姉妹である」のほかに、「多夫多妻」についても紹介しました。

例：苜耨戸辺(山代之産名津比売)
⑤記紀を「母と妻が姉妹である」と「多夫多妻」から見ると、雄略天皇の「母と妻が姉妹である」という系図にたどり着きますが、その話は、また次に発表の機会があれば、したいと思えます。(以上)

編集後記

事務局長 菊池秀夫

年内になんとか会報「邪馬台国新聞」第2号を発行することができました。しかも今回は前回のちょうど倍の情報量になります。初回と異なり、今回は原稿募集の形をとりましたので、はたしてどのくらい原稿が集まるか不安でした。しかし、嬉しいことに締め切り前に続々と原稿が届いてきたので、今度は大変な作業になると思うようになりました。

今回は特に、特別顧問九名の先生方から投稿をいただき、質的にも量的にも充実した内容となりました。しかし残念なのが、会員からの投稿が二件(我が著書「蘇我の謎」を含めて)しかなかった事です。ホームページ上ですでに機能を果たしているかもしれませんが、活字として後世に残すことも重要だと思えます。論文のような堅苦しい文章ではなく、ブログみたいな気楽な内容でもよいと思えます。当会報は会員向けのもですが、国会図書館に納本しており、文化庁をはじめ研究機関やマスコミにも配布していく予定です。会報は会員交流の場所でもあります。会員皆様の投稿をお待ちしております。

今回の会報は、イラストや写真が少なく、文字だらけになってしまったので堅苦しい体裁となってしまいました。今後は改善を重ね、カラー化も視野にして定期発行を目指してすすめていきたいと思っております。皆様の「意見お持ちしております」。

第1回 狗奴国サミット in 沼津

～高尾山古墳と狗奴国の魅力を知る～

狗奴国は邪馬台国と同様に日本列島の孤島として重要であるにも関わらず、あまり注目されていません。
 邪馬台国に関して文献や説と九州説が長年譲って行なわれていますが、狗奴国についてはなされていません。
 狗奴国の関心を高めることをねらいとして、全国の狗奴国の候補地を中心に「狗奴国サミット」を企画しました。
 第1回目は高尾山古墳の保存で注目されている沼津市で開催します。

高尾山古墳の位置

静岡県沼津市東蔵堂

- 沼津駅の北約2.5km(徒歩約30分)
 - 東蔵堂自治会館・熊野神社付近
- ※周辺に駐車場はありません。
 (徒歩かバスを利用)

2016年2月13日(土)

13:00～16:30 (12:00受付開始)

【会費】800円(全国邪馬台国連絡協議会会員は600円)

【受付】当日受付(先着順)

【場所】

沼津市民文化センター
 小ホール

沼津市御幸町15-1

●沼津駅(南口)から徒歩約15分
 (市役所近く)



第1部

高尾山古墳の魅力について

—東日本の古墳時代の幕開け—

I 概要説明 現地ボランティア

II 基調講演

- 大塚 初重先生講演(明治大学名誉教授・元日本考古学協会会長)
 「高尾山古墳の重要性」
- 原 秀三郎先生講演(静岡大学名誉教授・元沼津市史編纂委員長)
 「高尾山古墳に葬られたのは誰か—日本史上に占めるスガ高尾山古墳の歴史的位置—」

第2部

狗奴国サミット

I 基調講演

- 森岡 秀人先生講演(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員・元日本考古学協会理事)
 「邪馬台国と狗奴国—その領域問題をめぐる考古学論争—」

II 研究発表大会

- ①狗奴国東海説・・・前田 豊氏(先古代史の会会長)
- ②狗奴国大和説・・・若井 正一氏(掛川市・袋井市中東遠総合医療センター副院長)
- ③狗奴国熊本説・・・菊池 秀夫氏(九州の歴史と文化を楽しむ会会長)

主催

全国邪馬台国連絡協議会

連携団体：歴史研究会(全国歴史研究会)
 zenyamaren@gmail.com

後援

沼津市/沼津市教育委員会

協力

日本家系図学会